かみなづきおぐれのあめの染るおりけり

誹諧歌

題しらず　讀人しらず

梅の花見にこそきつれうぐひすのひとくくといとひしもをる　素性法師

山吹のはな色ごろもぬしやたれとべどとたへずくちなむこがくれて　藤原敏行朝臣

いくばくの田をつくれればか時鳥しでの田をさをあさなくよぶ　藤原かねすけ

七月六日、七夕の心をよみけるバ

いつしかとまたぐらをあまの脛にあげて天の河原をけふや渡らむ　凡河内躬恒

題しらず

むつごとともまだ盡なくにあけぬめりいづらハ秋の長してふ夜ハ　僧正遍昭

○誹諧誹の字は俳の字の草書より誤りたるなるべしといふ

○梅の花云ふ花見んと來しものを人來くと鳥はいとひけに啼をるとなり

△志での田をさは郭公の異名なり元來其鳴聲なるを田長を呼ふことに聞きなして名とせしなりといふこゝにては田長を呼ふことにいひかけたり

○いつしかと云ふいつしかあはんと待かねたる心いそぎに衣のすそをも脛までまくり上て天の河原を渡らんとなり△またくはまつを延たるなり

あきの野になまめきたてる女郎花あなかしがましく花もひとときこそ　讀人しらず

あきくれば野べにたはるゝ女郎花いづれの人かつまで見るべき

あきぎりのハれてくもれべをみなへし花の姿ぞ見えかくれする

花と見て折むとすれば女郎花うたゝあるさまの名にこそ有けれ

寛平御時、きさいの宮の歌合の歌　在原むねやな

秋風にほころびぬらし藤ばかまつゞりさせてふきりくすなく

明日、春立んとしける日、隣の家の方より、風の、雪を吹こしけるを見て、其隣へ、詠て遣しける　清原深養父

冬ながら春のどなりのちかければなかがきよりぞ花はちりける

題しらず　讀人しらず

石のかみふりにし戀の神さびてたゝるにわれはいぞねかねつる

枕よりあとより戀のせめくればせむかたなみぞとこなかにをる

○秋の野に云ふ秋の野になまめきて色を爭ひ立てるかゞしき事ぞすべて盛と云もたゞ一時にこそと女郎花をかりて人をいましめたるなり

○秋來れば云ふ野べに蟋蟀て居る女郎花なれば道行人の誰か扱さゝずに見るべき誰にても手をつくるとなり

○花と見て云ふ女郎花を花と思ひて折らんとすれば女郎花といふ名は奇怪の名なるによりて手をかけて折られぬとなり

○石上云ふ我戀の久しくなりて崇るにや夜もねられずとなり

○枕よりあとよりは枕邊より脚邊よりなり△なみはなくなり△をるはふさずして座して居るなり

○戀しきか云々どのやうに戀やみする人の形でも瘠てもかれても其體はあるものときゝて有しが我は戀にて心が心にてなければ立ても居ても此體のなきやうに覺ゆるとなり

○ありぬやと云々あばし逐見ずてもあらるゝやと試に日を隔つればさてはえたへがたき心地するとなりあはでこゝろみるは戯にするわざなれば戯にくしといへるなり

○足曳の云々山田のかゝしのやうなる故さへ我を望みて逢たしといふ憂たき事よとなりΔそほづとは山田の實保止といへる神の名よりいひて今いふかゝしの事なり

○人に逢ん云々思ふ人に逢ふよしのなき夜は其人を思ふ思ひが火の走るやうに走りて胸をこがして居るとなりむねはしるとは心さわくをいふ

戀しきの形もかたてそありときけたてれをれどもなき心地する。

ありぬやと心見がてら逢ひ見ねばたゝふれにくきまでぞ戀しき

耳なしのやまの口なしえてしがなれもひの色のあたぞめにせむ

足曳の山田のそほづれのれさへ我をほしといふれはしきこと

紀のめのと

ふじのねのならぬれもひにもにばもえ神だにけたぬむなし煙を

紀ありとも

逢ひ見まくほしは數なくありながら人につきなみ惑ひてそすれ

小野小町

人にあはむつきのなきには思ひれきて胸はしり火に心やけをり

寛平御時、后宮の歌合の歌　藤原興風

ゑる霞たなびく野べのわかなにもなりみてしがな人のつむやと

讀人志らず

題しらず

○思へとも云々れもはぬにはあらされど彼人は浮薄なればかなたこなたとかゝつらふ心あればうとく思はるゝとなり霞のいゴかたの山へもかゝるにたとへたり

○秋の野に云々秋の野に年經て妻もなき鹿の何とて我戀りかひある如く鳴ぞとなり

○蟬の羽の云々今こそ思ふ人の心薄くあらめかくてもなれ行かば我に又思ひよりもたなんと云を夏衣の薄きにたとへ且衣はなるれば折目みたれよるにたとへたり

○隱沼の云々諸共に寢さへせずは名は立まじければ只かよひくる事はいと玉ふなとなりΔねなは草菜の事なりぬなはを繩によせて繩は繰るものなれば來るないとひそといへるなり

○ことならば云々とてもこのやうに逢て臭れぬなら一向に思はずといひきらばよかるべきに否ともいはず何故に孫をかけたる如くにひきかゝり居る事そとなりΔ心のくまとは山阿河曲路隈(クマ)なとによせていへるなり

思へどもなほうとまれぬ春霞かゝらぬやまのあらじとれもへば　平文

春の野のあげき草葉のつまごひにとびたつ雉のほろゝとぞなく　紀よしひと

秋の野につまなき鹿のとしをへてなぞわか戀のかひよとぞなく　躬恒

蟬の羽のひとへに薄き夏ころもなればよりなむ物にやはあらぬ　忠岑

隱沼(カクレヌ)の下よりれふるねぬなはの寐ぬ名ハたゝじくるないとひそ　讀人志らず

ことならば思はずとやハいひてぬなぞ世の中の玉だすきなる　讀人志らず

れもふてふ人の心のくまごとに立ちかくれつゝ見るよしもがな

思へどもれもはずとのみいふなれべいなや思ハじ思ふかひなし

△関のかたに云〻関り近處にて誰なりとも昴ひよかしと思へどそれさへひぬ事なの意にてはなひるは俗にいふくさめなり出てゆかんとするに人のはなひれば忌て出ぬといふ諺のありしなるべしといふ

○さかしらに云〻夏の間はかしこさうに暑きにより て獨寐するといひまぎらし說けども冬になりて笹葉などの霜風にさやぐ寒夜の獨寐はいかにも云ひかたなしとなり

△はつかには値にと云意と二十日といふ意とをかぬ△つきなさは便宜なき意と月無き意とをかぬ

われをのみ思ふといはゞあるべきをいでや心はれほぬさにして
われを思ふ人を思はぬむくいにやわがれもふ人のわれを思はぬ
一本深　養父

思ひけむ人をぞともに思はましまさしやむくいなかりけりやは
一本讀人志らず

出てゆかむ人をとゞめむよしなきに隣のかたにはなもひぬかな

紅にそめしてゞろもたのまれずひとをあくにいうつるてふなり

いとはるゝ我身は春の駒なれや野がひがてらにえなちすてつる

鶯のこぞのやどりのふるすとやわれにはひとのつれなかるらむ

さかしらに夏は人まねさゝの葉のさやぐ霜夜をわがひとりぬる
平中興

あふことの今ゝはつかに成ぬれば夜深からではつきなかりけり
左のれほいまうち君

○もろこしの吉野の山、もろこしに吉野山あるにあらずたゞもろこしのよしの山にも追ひいたらんといへる意なり

○雲はれぬ云〻雲のかゝりて晴れずにある淺間の山のやうに疑の晴もせぬさきに止むるは淺はかの事なり人の心をとくとたゞし見たる上止むるならば止めよとなり

○難波なる云〻今まで何事にも古くなりし事には長柄の橋の古きにたとへしがろの橋も今は新しく造りかへられし故に此やうにふるさへもなりたとへにせむ物なしといへる意なり

○まめなれど云〻堅く實体なれど善き事もなし苅萱の乱れたるやうに乱れて放埒の者も惡しき事なしといひて我は實体なれど甲斐なしと歎きたるなり

○いとこの云〻〻うが從兄弟なる男のくそを思ひて懸想するよしをある人のおか〳〵の事をきゝつといひければなり△よそてはさもあらぬ事をさなりといひよするなり

○ようなから云〻我れに懸するやうによそながらいふは眞實のとにあらず只偽にいふばかりなりとの意△いとのよるとはいとこを糸にいひよせいつはりを針によせ、すくはすきことをする意と糸による針に着く意とをかねたり

もろこしの吉野の山に籠るともれくれむと思ふわれならなくに
なかき

雲はれぬあさまの山のあさましや人のこゝろを見てこそやまめ
伊勢

難波なるながらのそこもつくるなり今はわが身を何にたとへむ
讀人志らず

まめなれど何ぞはよけく苅萱のみだれてあれどあしけくもなし
興風

何かその名のたつ事の惜からむ志りてまどふはわれひとりかは
いとこなりけるをとこによそへて、人のいひければ

よそながら我身にいとのよるといへばたゞ偽にすくばかりなり
題しらず

ねぎことをさのみ聞けむ社こそてはなげきのもりとなるらめ

大輔

なげきこるやまとし高くなりぬればつら杖のみぞ先つかれける

讀人しらず

なげきをばこりのみつみて足引の山のかひなくなりぬべらなり

人こふることを重荷とになひもてあふぢなきこそ侘しかりけれ

霄の間に出て入ぬる三日月のわれてもの思ふころにもあるかな

そへにとてとすればかゝりかくすればあないひ知ずあふさきるさに

世の中のうきたびごとに身をなげば深き谷こそあさくなりなめ

在原元方

世の中はいかにくるしとれもぶらむこゝらの人に恨みらるれば

讀人しらず

なにをして身のいたづらに老ぬらむ年のれもはむ事ぞやさしき

△なげきは歎に木をよせたるなり △こるさは伐る事△つら杖は頬杖の事物思ふ時のかたちなり

△あふぢなき云ゝあふこは逢期に物を荷ふ扱をかねたり

△われてはわりなくより轉れる詞なりわりなくはとわりなしの略言なり

○うへにとて云ゝ△其方にとて左すれはあしく右すれは又其方もあしく行ちがひのみして思ふやうならぬを云なり△あないひしらずはいふへきやうもあらすとなり△あふさきるさは合ふさ離るさの意即一方よければ一方のあしきをいふ

○世の中は云ゝこは世の中を一の人間にかたさりでよめるなり△こゝらの人はあまたの人なり

△やさしきは祉しの意

○身は捨てつ云ゝ身は捨てたれど心は捨てずじてさゝめれゝべしつまる處はどのやうになると見とゝくるやうにとなり

△すきものは戯き物に好色者をかねたり

○法皇は宇多天皇△西川は桂川なり

○佗しらには無儀さうになり△ましらとは狂のこと

○世を厭ひ云ゝ此衣はうき世を厭ひて所定めする〳〵僧の水陸〳〵へ立よりて丸寢をする五倍子染（ウツフシゾメ）の麻衣なりとなり△うつふしは其まゝに臥すまろ寢をいふろれを五倍子染に云かけたるなり

興風

身は捨てつ心をだにもはふらさし終にいかゞあると知るべく

千里

白雪のとゞまれる我が身はふりぬれど心はきえぬものにぞありける

讀人しらず

うめの花さきてのゝ後のみなれべやすきものとのみ人のいふらむ

法皇西川にわしましたりける日、猿、山のかひにさけぶ、といふことを題にて、よませ給ひける

躬恒

佗しらにましらなきそ足引の山のかひある今日にやあらぬ

題しらず

讀人しらず

世を厭ひこの本ごとにたちよりてうつぶし染のあさのきぬなり

古今和歌集卷第二十

○大歌所は專ら神樂風俗等のうたひ物をつかさどれる官人其他歌人等を召れかゝる所なり
○れほなほひとは新嘗會の大祭事の覓に常さまに直ざせ給ふ日宴を給ふを云
○あたらしき云々、行末千年までも毎年年の始に此通りに樂しき事を存分に爲し盛し終めとなり

大歌所御歌

れほなほひの歌

あたらしき年の始にかくしこそ千とせをかねてたのしきを（めつ）

續日本紀ニ日本紀ニハ

ふるきやまと舞のうた

もゝとゆふかつらき山にふる雪のまなく時なくわもほゆるかな

○もゝとゆふ云々、もゝとは茂き木にて若木の茂く生ひたるを其もとを伐りて薪にせんとて藤葛もて結ふなり此意もて葛城山に冠らせたるなり歌の意は戀の心なるを君をも神をも思ふよしにうたへるなり
○近江ふりは近江風俗、即、近江歌といふに同じ

近江ぶり

近江より朝立くれば打ねの野にたづぞなくなるあけぬこの夜は

みづぐきぶり

○みつ〳〵しのは枕詞△岡の屋縣山城にあり
○志はつ山は難波なり○笠縫島も同所なり

水ぐきの岡のやかたに妹とあれとねてのあさけの霜（雪）のふりはも

志ハつ山ぶり

○神あそびの歌は神樂歌を云あそひは樂を二する事
○とりものゝ歌は神樂を二する時手に採り物はやす其採物の歌なり採物にれ種あり、即、榊、幣、杖、笹、弓、劍、鉾、杓、葛等なり
△神のきねかもきねは木根にて、即、榊をいふ

○陸奥の云々陸奥の安達の眞弓を我引ならば弓は本末よりてゝくる物なるによりてゝのやうにこの思ふ人も此方より來れ但し人目にたゝぬやうにへとなり

○さいのくまは萬葉に左檜隈とあるを歌ひかへしにやこの檜隈は大和にあり
○かへしものゝ歌はやまと琴の呂を律にかへすを云、即、始にさかねふくなとの呂の歌をうたひて後に律にかへして青柳の歌をうたふなり

志ハつ山うち出て見れば笠ゆひの嶋こぎかくるたななし小ぶね

神あそびの歌

とりものゝ歌

神垣のみむろのやまの榊葉はかみのみまへに志げゆあひにけり

志も八たびれけどかれせぬ榊葉のたちさかゆべき神のきねかも

まきもくのあなしのやまの山人と人も見るがにやまかづらせよ

み山にはあられふるらしと山なるまさきのかづら色づきにけり

陸奥のあだちのまゆみわがひかばすゑさへよりこ志のびくに

我か門のいた井の清水さと遠み人しくまねばみくさおひにけり

ひるめのうた

さゝのくまひのくま川に駒とめて志ばし水かへかげをだに見む

かへしものゝ歌

あをやぎをかたいとによりて鶯のぬふてふ笠はうめのはながさ

○はかねふく云々、あらかねをたゝらにかけてまかねにふくといふきびの中山のこしに帶たるやうに見ゆる細谷川の音のさやけさよ

△承和は仁明天皇の年號ほんべは大嘗（オホニヘ）の音便

△水の尾のみかどは清和天皇なり

△元慶は陽成天皇の年號

△仁和は光孝天皇の御時なり

△今上は醍醐天皇也

○東歌これもうたひは物に用ゐられし東の國々の歌どもなりとぞ

まがねふくきびのなかやまねびにせる細谷川のねとのさやけさ

「此歌は、承和のねほんべの、きびの國の歌」

美作（ミマサカ）やくめのさら山さらく〜にわが名いたてじよろづよまでに

「これは、水の尾の御べの、美作の國の歌」

みのゝくにせきの藤川たえずして君につかへむよろづよまでに

「これは、元慶のおほんべの美濃の歌」

君が代はかぎりもあらじ長はまのまさごの數はよみつくすとも

「これは、仁和の御べの伊勢の國の歌」

近江のやかゞみの山をたてたれがかねてぞみゆる君が千とせに

「これは、今上のねほんべの近江の歌」

大伴黒主

東歌

みちのくうた

○あふくまに云々陸奥のあふくま川に霧立波りて夜明ぬとも君をばやらじまてばすべなし

○みちのくは云々陸奥にはこかしにれもしろき屋あれど別してこの塩竈の浦をこゞ舟の綱を引てゆくけしきがれもしろしとなり

△都のつとは都土産なり

○みさふらひ云々御侍衆御笠を召せと申上けよ此宮城野木陰露のたゝりは雨よりも增されりとなり

○最上川云々最上川を上るもあれば下るもある稻を積たる稻舟の名のように否といふにはあらねど障りあれば此月ばかりは逢ふ事能はずとなり

○こよろぎの云々こよろぎの磯にこゝかしに立あるきて磯菜をつみ居る海人の子どもをぬらすな磯へ打よせずに沖に居れ波よとなり△めざしば魚子を云古へ童子は額の髮の末をきりて目をさしかゞす如く覆ひたるをもていふ

○筑波根のこのも云々此山の木陰世に茂しといひ傳ふれど君が御惠の陰にまさりけはなしといへるなり△このもかのもは此面彼面也

あぶくまに霧立わたり明けぬとも君をばやらじまてばすべなし

みちのくはいづくはあれど鹽竈のうらこぐ舟のつなでかなしも

わがせこを都にやりて塩がまのまがきの志まのまつぞ戀しき

をぐろ崎みつのこ島のひとならば都のつとにいざといはましを

みさふらひみかさとまうせ宮城野の木の志た露は雨にまされり

最上川（モガミカハ）のぼれはくだるいなぶねのいなにはあらずこの月ばかり

君をおきてあだしこゝろをわがもたばすゑの松山浪もこえなむ

さがみ歌

こよろぎの磯たちならし磯菜つむめざしぬらすな沖にをれなみ

ひたち歌

筑波根のこのもかのもに陰はあれど君がみ蔭にまさるかげはなし

筑波根の嶺のもみぢ葉れちつもりあるもあらぬもなべて悲しも

甲斐うた

○かひかねを云ふ甲斐が嶺をありくとあさやかに見たしとれもふに心なくも横たはりふして邪覓するさやの中山かなとなり△けゝれは心といふことの甲拐の方言也
○甲斐か根を云ふ甲斐か嶽の峰をも越してゆく風を人になしたしたかせは都へ言を傳へて遊はさんにとなり

○家々稱證本云ふこの次の歌ともは家ふの證本ぞといふに脩入てありしをこれは此集に入ましき分なりといふ事を傳へ聞て墨もてけしてありしを定家卿の被出して今こゝに別に集められたるなり

○そま人は云ふ杣人は材木を引出すならしそれ故かこだまがひゞきわたるとなり△そま人は材木をとる人を云△宮木は大宮を造る料の木といふ事なり

○かけりても云ふ死人の魂が空を飛て又かへり來りてし何を見やうぞ何も見るべきものはなし自分の死骸はやきて燒となりにし物をとなり

かひがねをさやにも見しがけゝれなく横ほりふせるさやの中山
甲斐が根をねこし山でし吹く風を人にもがもやとづてやらむ

伊勢うた

をふの浦に片枝差覆ひなる梨のなりもならずもねてかたらはむ

冬の加茂の祭の歌　藤原敏行朝臣

ちはやぶる加茂のやしろの姫小松よろづよふとも色はかはらじ

家々稱證本之本乍書入以墨滅歌今別書之

巻第十　物名部

ひぐらし　貫之

そま人は宮木ひくらしあしひきのやまの山びとよびとよむなり

在郭公下、空蟬上、　勝臣

かけりても何をかたまのきてもみむからは燒となりにしものを

○くれのむも草の名固香の事

○こし時と云ふかの人の來りし時分なりと思ひて戀しく思ひ居れば日暮頃に其人の面影ばかり見えてこゝらをあるきわたるやうに見ゆる事かなとなり

○たきのゐて云ふ體へ熾火を置て我身をやくよりも悲しきは都た殘ると島へ行くものとの別なりけりとなり

○そめどのは京都正親町の北京極の西にあり△あはたは三條より相坂山の方へ出る處なり
○うきめをば云ふ世のうき目を見るを厭ひてそをよそに見て雲深くたつ山の絶へ遁れゆくとなり△あはたつは深くたつをいふ

をかたまの木友則下

くれのれも　貫之

こし時と戀ひつゝをれば夕ぐれのれもかげにのみ見え渡るかな

忍草利貞下

れきの井　みやこしま　小野小町

れきのゐて身をやくよりも悲しきはみやこしまべの別なりけり

からことと清行下

そめどの　あはた　あやもち

うきめをばよそめどのみぞのがれゆく雲のあはたつやまの麓に

「此歌は水のをの帝の、染殿より、粟田へうつり給うける時に、よめる」

巻第十一

奥山の菅の根まきのぎふる雪の下

○わきもこに云〻吾妹子（ワギモコ）に逢ふといふ逢坂山のゑのすゝきの穂に出ぬやうに裏に出さずに裏にて戀わたるかなとなり△吾妹子とは女を親み呼ふ語

けふ人をこふるこゝろは大井川ながるゝみづにれとらざりけり

わきもこにあふ坂山のゑのすゝきほには出ずも戀ひわたるかな

巻第十三

戀しくばゑだにを思へ紫の下

いぬがみのとこの国なるいさや川いさと答へよ我が名もらすな（なとり）

「この歌、ある人、あめ帝の、近江の采女にたまへると」

かへし　うねめの奉る

○いぬかみの云〻犬上の床の山にあるいさや川のやうに若し人か問ふならばいざしらぬゝ答へよ必我名をもらすなとなり△犬上は近江の犬上郡なり

やましなの音羽の瀧のれとにだに人のゑるべくわがこひめやも

巻第十四

れもふてふことの葉のみや秋をへて下

衣通姫の、ひとりねて、帝をこひ奉りて

わかせこがくべきよひなりさゝがにの蛛の振舞（フルマヒ）かねてゑるしも

深養父、戀しとはたがなづけゝけんことならん下

○わかせこが云〻吾兄子（セコ）今宵は必來べき夜なりと思はる何となれば此の蛛のなすわざにてさへかたよりゑるゝとなりさて蛛は衣にかゝる時必思ふ人なとのくる前兆なりといふ事上古よりの諺にてゑかよみ玉べるなら蛛をさゝかにといふは蟹に似て小さきよしなり△せことは兄又は夫などすべて女より男を親しみて呼ふ語

道ゑらばつみにもゆかむ住の江のきしにれふてふこひわすれ草

貫之

○夫和歌者託其根於心地云〻歌といふものはその根ざしを心の地面に託て其花を言葉の林にひらかしむるものなりとなり

△人之在世不能無爲云〻人のこの世にいきて居る間は事業多くして無爲なる能はず從て喜怒哀樂相生ずとなり

△今反歌之作也反歌長歌の反なり即短歌の事と見るべし

△天神の孫は彦火々出見尊を云△海童之女は豐玉姫を云△混本、和歌の一體五字七字七字の三句なるをいふ上の句に下の句を混じたる如くなればいふ

△宮瀧川之詞は聖德太子片岡山の飢人を見て衣物をあたへ歌を誦みさづけ王ひし記其飢人の返歌して

古今和歌集序

紀淑望

夫和歌者。託其根於心地。發其花於詞林者也。人之在世。不能無爲。思慮易遷。哀樂相變。感生於志。詠形於言。是以。逸者其聲樂。怨者其吟悲。可以述懷。可以發憤。動天地。感鬼神。化人倫。和夫婦。莫宜於倭歌。倭歌有六義。一曰風。二曰賦。三曰比。四曰興。五曰雅。六曰頌。若夫春鶯之囀花中。秋蟬之吟樹上。雖無曲折。各發歌謠。物皆有之。自然之理也。然而神世七代。時質人情欲無分。倭歌未作。逮于素盞嗚尊到出雲國。始有三十一字之詠。今反歌之作也。其後雖天神之孫。海童之女。莫不以倭歌通情者。爰及人代。此風大起。長歌短歌旋頭混本之類。雜體非一。源流漸繁。譬猶拂雲之樹。生自寸苗之煙。浮天之波。起於一滴之露。至如難波津之什。獻天皇。富緒川之篇。報太子。或事關

（いかるがや富の小川のたえばこそ我れほきみの御名は忘れめ）とよみて奉りしをいふ

△移彼漢家之字云々漢土をの字移して我大日本の風俗をなひけてより人事一変して詩はかりつくるやうになりて歌が次第に衰へたりとなり

△半爲婦人之名右々半分は女のそばにれくものゝやうになりて貴公の前へはさし出しにくきやうになりぬとなり

神異。或興人幽玄。但見上古歌。多存古質之語。未爲耳目之翫。徒爲教誡之端。古之　天子每良辰美景。詔侍臣預宴筵者。獻倭歌。君臣之情。由斯可見。賢愚之性。於是相分。所以隨民之欲。擇士之才也。自大津皇子之初作詩賦。詞人才子。慕風繼塵。移彼漢家之字。化我日域之俗。民業一改。倭歌　衰然猶有先師柿本大夫者。高振神妙之思。獨步古今之間。有山邊赤人者。並倭歌仙也。其餘業倭歌者。綿々不絶。及彼時變澆漓。人貫奢淫。浮詞雲興。艶流泉涌。其實皆落。其花獨榮。至有好色之家。以此爲花鳥之使。乞食之客。以此爲活計之媒。故半爲婦人之右。難進大夫之前。近代存古風者。纔二三人而已。然長短不同。論以可辨。花山僧正。尤得歌體。然其詞花而少實。如圖畫好女。徒動人情。在原中將之歌。其情有餘。其詞不足。如萎花雖少彩

△文琳は文屋の康秀の字也

△野宰相は参議小野篁△在納言は中納言在原行平也

△淵變爲瀨之聲云々今はかの飛鳥川のきのふの淵そけふは瀨になる

色。而有薫香。文琳巧詠物。然其體近俗。如賈人之著鮮衣。宇治山僧喜撰。其詞華麗。而首尾渟滯。如望秋月遇曉雲。小野小町之歌。古衣通姫之流也。然艶而無氣力。如病婦之著花粉。大友黒主之歌。古猿丸大夫之姿也。頗有逸興。而體甚鄙。如田夫之息花前也。此外氏姓流聞者。不可勝數。其大底皆以艶爲基。不知歌之趣者也。俗人爭事榮利。不用詠倭歌。悲哉。悲哉。雖貴兼相將。富餘金錢。而骨未腐。於土中。名先滅於世上。適爲後世被知者。唯倭歌之人而已。何者。語近人耳。義慣神明也。昔平城　天子詔侍臣。令撰萬葉集。自爾以來。時歴十代。數過百年。其後倭歌棄不被採。雖風流如野宰相。雅情如在納言。而皆以他才聞。不以斯道顯。陛下御宇。于今九載。仁流秋津洲之外。惠茂筑波山之陰。淵變爲瀨之聲。寂々閉口。砂長爲巖之頌。洋

さいふやうに物の變とやすきを歎くものは寂として口を閉て靜まりかのさゝれ名のゝはぼとなりてこけのむすまでといふやうにいはひを述る壁は耳に滿てりるなり

々滿耳。思繼既絶之風。欲久廢之道。爰詔大内記紀友則。御書所預紀貫之。前甲斐少目凡河内躬恒。右衛門府生壬生忠岑等。各獻家集並古來舊歌。曰續萬葉集。是重有詔。部類所奉之歌。勒爲二十卷。名曰古今倭歌集。臣等詞少。春花之艶。名竊秋夜之長。況乎進恐時俗之嘲。退慙才藝之拙。適遇歌之中。以樂吾道之再昌。嗟乎人丸既沒。倭歌不在斯哉。于時延喜五年。歲次乙丑四月十八日。臣貫之等謹序。

古今和歌集終

古今集作者一覽

春

在原元方筑前守棟梁男　紀貫之望行男　素性法師良峯宗貞男　前太政大臣藤原良房　文屋康秀父祖未詳山城大掾　縫殿助等に歷任す清和陽成兩朝に仕へし人也　藤原言直從五位下安繩男　壬生忠峯散位安綱男　源當純右大臣能有男　紀友則有友男　大江千里參議音人男　在原棟梁業平王男　在原行平阿保親王男　源宗于是忠親王男　僧正遍昭良峰安世男　凡河内躬恒父祖未詳。或抄云和泉大掾　伊勢伊勢守藤原繼蔭女　東三條左大臣嵯峨帝御子源常公也　在原業平阿保親王男　紀有友友則の父ならむとい　惟喬親王文德帝の御子　承均法師父祖未詳元慶頃人　風在近衛少將滋實男　大友黑主都堵牟麻の子近江國滋賀郡領　良峯宗貞大納言安世男　藤原因香傳未詳。尼敬信女　菅野高世從三位良道男　藤原好原後蔭中納言有穗男　小野小町康秀と同時頃の人父祖未詳。小野氏系圖に小野良實女とあり　藤原興風相模掾道成男　典侍洽子春澄善繩女　藤子阿波守　三國町仁明帝更衣　紀秋峯美濃守善峯男

秋

藤原敏行按察使富士麻呂男　藤原忠房右京大夫興嗣男　藤原菅根左兵衛督良尚男　文屋朝秀康秀男　布留今道三河介貞觀頃人　小野美材參議峯守男　左大臣藤原時平　藤原定方内大臣高藤兼覽王惟高親王男　平貞文右少將好風男　紀淑望中納言長谷雄男　藤原勝臣阿波介發生男と云　坂上是則好蔭男　菅

原朝臣 貞公也 藤原關雄 從三位 眞夏男 春道列樹 主税頭 新名男 冬 小野 篁 參議峰守男 賀 紀これをか 父祖未詳

或抄惟熙とあり 在原滋春 業平 離別 伊香厚行 神祇大副 厚代 なにそのよろすを 傳未詳或抄に難波萬男とあり 大納

言定卿女 良峰秀岳 父祖未詳寛平頃人伯耆守 藤原兼茂 右中將 利基男 平 元規 播磨介 中興男 白女 大江玉淵 女遊女也 源實 參議 舒男 藤

原兼輔 右近中將 利基男 幽仙法師 昌泰頃人大安寺住侶 兼藝法師 伊勢小掾 古之子 羇旅 安倍仲麿 中務大輔正五位上船守男 れ

と 壬生益成女或抄乙とあり 紀 有常 刑部卿 名虎男 物名 小野滋蔭 父祖未詳。寛平頃人掃部頭 矢田部名實 傳未詳。昌泰頃人 平

篤行 傳未詳。或抄云筑前守 高向利春 未詳 景式王 惟條親王男 眞靜法師 淳和頃人河内國人 紀乳母 陽成帝御乳母 兵衛 藤原高經

女 安倍清行 大納言安仁男 阿保經覽 今雄男延喜頃人 源ほとこそ 或抄云大納言源弘孫伊與守弼男一云揚男源忠とあり 都良香 腹赤男

僧正聖寶 眞觀寺座主 戀 宗岳 ほより 傳未詳 御春有助 父祖未詳河内國人 藤原國經 贈太政大臣長良男 小野春風

大宰大貳葛絃男太膳大夫 橘 清樹 敬雄男 藤原忠行 近江守有貞 中臣東人 中納言意美麿 河原左大臣 嵯峨帝御子源融公也 下

野雄宗 未詳 近院右大臣 文德帝御子源能有 閑院 源宗于女也 さかねのひとさね 父祖未詳。延喜御宇人 藤原仲平 昭宣公男

貞登 仁明帝御子 雲林院親王 仁明帝御子常康親王 小野貞樹 貞利甲斐守 兵衛 藤原高經女 小野姉 或抄云良實女 典侍直子

父祖未詳 因幡 桓武帝孫基世王女 菅野直臣 父祖未詳 哀傷 僧都勝延 承均兄 上野峯雄 父祖未詳。或抄云昭宣公隨身 紀もち

ゆき 或抄に紀茂行公とあり一說貫之父と云 藤原これもと 或惟本とあり傳未詳。 雜 尼敬信 因香母 神退法師 未詳 橘 長盛

尾張守秋實 三條町 名靜子紀名虎女 物部貞名 未詳。或抄云越前小掾 高津内親王 桓武帝皇女 みやちのきよき 未詳。或抄宮道潔

樹とあり 喜撰法師 傳未詳 二條 源至女 陸奥 橘葛直女 文屋有季 傳未詳 雜體 紀 淑人 長谷雄 平 中 內膳

正忠望 久曾 源造女 讃岐 讃岐守安部清行女 大輔 但馬守弼女

明治廿六年三月廿八日印刷出版

校註兼發行者　飯田永夫　東京市本郷區田町三十三番地

發行所　文學倶樂部　東京市本郷區田町三十三番地

印刷者　三島謙三　東京市神田區南神保町十番地

印刷所　三島印刷所　東京市神田區南神保町十番地

版權所有

版權登錄

大賣捌書房

東京　同　同　同　同　同

大倉書店　吉川書店　東盛堂　上海書店　武藏書屋

東京　同　同　同　大坂　大坂

嚴々堂　上田屋　青柳堂　博文堂　梅原書店　前川書店

文學倶樂部發行書目

飯田武鄉著

日本書記通釋

全廿冊六冊
已成一冊金
卅錢郵稅共

コハ古代ヨリ持統天皇ニ至ルマデノ上古史即チ日本書紀ヲ解シ易ク精密ニ通釋セラレタルモノナリ

飯田永夫著

伊勢物語

標註
參考

全一冊
金十錢
郵稅共

讀賣新聞評曰高田與清翁曰く伊勢物語は業平朝臣世を愛ひ物に思ひける時此冊子を書て憤をはらしけるなりと而して其歌文の勝れたること紫史と相匹敵すされば國文國歌を學ばんとするもの必ず此書を欠くべからず今飯田永夫氏丁寧に之を標註し簡に失せず煩に流れず頗る其肯綮を得たり猶普通仮名本、眞名六條本、塗籠本等の異同を擧げて參考としたれば諸學校の教科書とするに適當なりと以てこの書の特質をしるべし

飯田永夫著

日本文典問答

全一冊
金十四錢
郵稅共

本書の管明にして能く皇國の文法語格を說明し盡せることは既に大方の見認する所なり今や大に增補の上第三版を發賣す請倍舊の高評を玉へ

飯田永夫著

竹取物語

校訂
標註

全一冊
金十二錢
郵稅共

(國會新聞評)古へより竹取物語に註釋を加へたる書いと多し去れど此書の如きは繁に過ぎず簡に失せずして著者の目的たる如き教科書となさんには適當のものと思はる殊に文中手爾遊波の大要を示さんとて傍らに双柱を附し言ひ掛け結の働きを知らしめたるなど著者の注意深きを見るべし

エ1944

文學俱樂部版

特22
754

標註参考 古今和歌集

国立国会図書館

085941-000-3

特22-754

古今和歌集（標註参考）

賀茂 真淵

本居 宣長／校本

M26

DBD-0549